

フランスメディアの科学ディスコース における「感情」の想定 — 電磁波問題を中心に —

出口 由美

1. はじめに

本論文では、フランスメディアにおいて、科学的な知識（以下、科学知）を一般人（grand public）に向けて伝達するディスコースを対象とし、そのメカニズムを探る。Moirand (2005) は、マスメディアの科学ディスコースの機能的な側面について、「とりわけ健康や食品、環境等の社会的事象が問題となる際、わたしたちの日常生活と密接に関係するがゆえに、読者の不安をさそったり、興味を惹きつけたりといった機能をもつ」とする。では、このようにディスコースの受け手としての一般人の日常生活に影響を及ぼしうる科学ディスコースにおいて、一般人はいかに考慮され、ディスコースに組み込まれるのだろうか。以上の疑問を出発点に、本論文では、フランスメディアの科学ディスコースの中でも、電磁波／電磁場の健康への影響に関する問題（以下、電磁波問題）をめぐる新聞記事を対象とし、一般人がディスコース上でどのように想定¹⁾され、その想定がディスコース上でどのように具現するかについて、その言語的形跡を探りつつ明らかにする。とりわけ、一連の電磁波問題の報道を通して一般人が抱いたであろう「感情」の想定がディスコースに現れる点を

1) 本論文で用いる「想定」の定義は、メイナード (1997) に従い、「話し相手が言う／考えているであろう内容を、あたかも言ったかのように話者が先取りし、記述すること」とする。

明らかにした後に、そのような感情の想定がマスメディアの科学ディスコースを通じた科学知の伝達においてどのように機能するかについて検討する予定である。

2. マスメディアの科学ディスコース

本章では、本論文の研究対象である、マスメディアの科学ディスコースを研究する際の視点を提示する。この領域の研究は、1982年に雑誌“*Langue française*”の第53号において「*La vulgarisation*」という題目の元に Mortureux, M.-F が編集者を努めた一連の研究に端を発し、現在に至っては、パリ第3大学の日常的・専門的ディスコースの研究センター (Centre de recherches sur les discours ordinaires et spécialisés : Cediscor) で研究が盛んに行なわれている。そこで次節からは、これらの研究の主要な論点を描きつつ、本研究の射程を提示する上で基礎となる観点をおさえない。

2.1 マスメディアの科学ディスコースの伝達形式

本節では、マスメディアの科学ディスコースがとる伝達形式を先行研究から明示する。

まず、Mortureux (1982, p. 3) は、専門家によって／専門家のために形成されるディスコースを *discours sources* (以下, D1), そして D1 が一般人に向けられた際のディスコースを *discours seconds* (以下, D2) とする²⁾。本論文の研究対象であるマスメディアのディスコースは後者にあてはまる³⁾。

続いて、D1 と D2 の伝達の側面に焦点をあてよう。まず、D1 が使用される状況における参加者は、複数の専門家ということになる。そこで専門家らは、論文の執筆や学会発表、学者内での討論等の活動を通し、

2) D1, D2 という用語の使用は、Autier (1982, p.5) に依る。

3) D2 はマスメディアのディスコース以外にも、教師と生徒のやりとりや、医師と患者の会話、大学の講義、教科書、百科辞書など、広範にわたる。

直接的／間接的に接触し、「新たなる知識」を日々生産してゆく。

それに対し、D2では状況が異なる。D1が一般人に開かれる際、「科学者」に加え、ディスコースの受け手である「一般人」が伝達の状況に加わることとなる。そのみならず、この2者間の架け橋として、「媒介者 (médiateur)」がディスコースの伝達に加わることとなる。つまりそこには、少なくとも「科学者」・「媒介者」・「一般人」の3者⁴⁾が参与する。そしてD2に参与する媒介者とは、「第三者 *troisième homme*」(Reboul-Touré, 2005, p. 197) や「科学の世界と大衆の世界の間のディスコースの管理人 *gestionnaire discursif entre l'univers de la science et celui du public*」(Moirand, 2005, p. 45) と言い換えられるように、ディスコースの伝達の状況において、「科学者の生産する知識」と「一般人の保持する知識」の間で生じる知識水準の距離を補うため、さまざまな活動をおこなう。たとえば媒介者は、「専門家ではない大衆」の間で生じうる問題に答え (Reboul-Touré, 2005, p. 197), 科学者による活動や発言について、補足や言い換え, 説明などをおこない, 一般人による科学知の「理解」の増大につとめる役割を担う (出口, 2010)。

以上を要約すると、本研究の対象とするマスメディアのディスコースはD2に該当し、そこには、科学知を構成する科学者、そして構成された知識を、理解できる範囲で受けとる一般人、そして一般人の知識量に見合った水準にD1を変換する媒介者が組み込まれる。こうして、D2には複数コミュニティのメンバーが参与し、お互いがそれぞれの役割を差し出しながら、ディスコースを通して伝達される意味の共作を成すのである。

以上では、マスメディアの科学ディスコース研究において基盤となる論点を紹介した。次の2.2では、Cediscorの研究がどのような視点から取

4) 独立した3者を示しているのではない。科学者自身が媒介者となる場合などのように、時として、科学者と媒介者が同一人物としてディスコースに現れることもある。

り組まれているかについて、簡単に触れる。

2.2 マスメディアの科学ディスコース研究の争点

先に示した Cediscor が研究の対象とするのは、科学的な「知識」の伝達についての研究といえる (Beacco, 1999 ; Moirand, 1997 ; Beacco & Moirand, 1995 ; Moirand, 1993 ; Mortureux, 1992 ; Beacco, 1992)。たとえば, Beacco & Moirand (*ibid.*, p. 32) は, Cediscor の研究の枠組みとして, D1 を科学者コミュニティの外に向けて伝達する際の言語形式 (普及 diffusion, 大衆化 vulgarisation, [知の] 形成 formation, 教育 enseignement) を提示している。つまり, ここでは, 科学知を一般に向けて普及する際の, 「知識の変換 (reformulation des connaissances)」が中心的な争点となる (Autier, 1982)。このような研究に取り組むにあたっての重要な視点として, Moirand (2007) は次のように述べる。

Le médiateur anticipe [ainsi] les questions qu'il imagine être celles de ses destinataires, le discours qu'ils pourraient tenir.

媒介者は, (このようにして,) 受け手のものであると想像する疑問点や, 受け手がとり行なうであろう [ある対象についての] ディスコースを先取りする。

ここでの, 「受け手がとり行なうであろうディスコース」とは, Cediscor の研究の流れからみると, 「知識」に相当するといえる。つまり, この一文を Cediscor の研究に引き寄せて説明すれば, 媒介者は受け手がある科学的な現象についても知識量を考慮し, 科学知を伝達する, という観点による研究パラダイムが存在していると思われる。

以上の点を前置きとし, つづく 3 章では, 本研究の視点を提示する。

3. 本研究の視点

2.2 では, Cediscor の研究が, 「知識」を争点になされている点を見た。

本研究では、このような流れの中に身を置きつつも、媒介者が一般人のもつ「感情」や「情念」、あるいは「内面」とよばれるもの（以下、「感情」に統一）を先取りし、科学ディスコースが構成される側面に着目する。ここでの感情とは、例えば、「怒り、憐れみ、恐れ、その他この種のもの、および、これらとは反対のもの」（アリストテレス、II 1378a 22-23.）をその定義にあてることにする。このような視点でディスコースを観察・分析することで、媒介者が電磁波問題の中にどのように一般人（とその内面）を位置付けるのか、そしてそのような位置付けがディスコースの展開にどのように作用するかについて取り組む。さらに、一般人の感情についての想定が、科学知の伝達においていかに機能するかについても明らかにする。

4. 分析方法

分析では、電磁波問題に関して2000年から2010年にかけて発行された、フランスの日常紙である『ル・フィガロ』（*Le Figaro*）、『ル・モンド』（*Le Monde*）をあつかう（計82記事）。これらは発行部数の多い全国紙であり、社会に影響を与え、世論を作り出す力をもちえるものといえる（高馬、2008）。記事の収集方法は、Reed Elsevierグループ⁵⁾が提供している世界最大級の国際的な情報データベースである、*lexis.com*からの検索である。検索ワードを、「*ondes électromagnétiques*」（電磁波）としたところ、ヒット数は207記事で、その内、電磁波問題に関係する記事は82記事であった。そこで5章ではこの82記事を対象に、次に示す手順で分析を進める。

5.1では、筆者が電磁波問題のディスコースを対象に行ってきた一連の研究を紹介し、ディスコースを通して伝達される知識の性質を見ておく。5.2では、一般人の感情の想定が、どのような語彙を伴ってディスコースに現れるかについて端的に示す。その後、感情の想定が、ディス

5) <http://www.reedbusiness.jp/profile/group.html>

コースの流れの中にどのように組み込まれているかについて、事例を観察・分析する。5.3では、ディスコースを通した科学知の伝達の面において、感情の想定がいかに作用しているかについて明らかにする。

5. 分析

5.1 分析①－電磁波問題をめぐるディスコースの性質

ここでは、出口（2010）の研究を振り返りながら、電磁波問題のディスコースを通して伝達される知識の性質について提示する。

電磁波をめぐっては、その危険性が科学者らによって十分に証明されていない段階にあるため、そのディスコースを「科学的に危険性が不確実視されているディスコース」として位置付けることができる。そして、電磁波問題がマスメディア上で話題となる際には、「電磁波は危険か否か?」といったように、危険性の有無を問う「疑問」がディスコースを構成する上での争点、あるいは基盤となる。そこで、「ある事象についての科学研究が発展途上の段階にある際、媒介者はどのような手段を用いて知識の伝達を行なうのか」といった問題が浮かび上がってくる（Moirand, 1992, 1997, 2007）。このことに関して出口（2010）が明らかにしたのは以下の2点である。

I. 対立関係の構成

電磁波が人体に危険か否か、という問題に関しては、科学者間のみならず、そのコミュニティーを越えて、危険性の有無に関する種々の声や行為が対立関係をもつものとして記述され、伝達される知識に「ゆれ」が生ずる点を明らかにした。以下にその事例を挙げる。

記事1：科学的な研究の結果間の対立

L'administration précise qu'“aucune preuve scientifique ne permet de démontrer aujourd'hui que l'utilisation des téléphones mobiles présente un risque notable pour la santé”, mais que “plusieurs études scientifiques [...]”

mettent en évidence la possibilité d'un risque faible après utilisation intense et de longue durée (plus de dix ans) des téléphones mobiles". [Le Monde, 16 juin 08]

行政機関は、「現在のところ、携帯電話の使用が、健康に顕著な危険をもたらすことを立証するいかなる科学的証拠も示されていない」が、「複数の科学研究によって、携帯電話を集中的かつ長期にわたって（10年以上）使用した場合に、若干の危険がある可能性が明らかになっている」と言っている。

記事 2：科学界－政界間の対立

Les antennes relais pour téléphones portables qui se multiplient dans le paysage et sur nos toits sont-elles dangereuses? Les scientifiques n'ont pas tranché mais en attendant les juges et les politiques font déjà jouer le principe de précaution. [Le Figaro, 27 Avril 2001]

風景の中や屋根の上に増えている携帯電話のアンテナは危険なのだろうか？ 科学者は決着をつけていないが、さしあたり裁判官や政治家はすでに予防原則を適用している。

記事 3：対立関係にあること自体が記述される例

Le téléphone portable est-il nuisible à la santé? Cette question souvent évoquée a fait l'objet d'études scientifiques dont les conclusions restent contradictoires. [Le Figaro, 18 mai 2000]

携帯電話は健康に有害なのだろうか？ たびたび言及されるこの問題は、科学研究の対象となっているが、その諸研究の結果は矛盾したままである。

記事 1 と 2 では、電磁波が危険か否かをめぐる複数の声や、この問題を争点に実行される行為が、逆接形をとらない、対立関係をもつものとして配置されていることがわかる。ちなみにこのような逆接形の使用は、

全体（82記事）の中で、137回登場する。また記事3のように、対立関係にあること自体が記述されるのは全体の中で22回みられた。

このような対立関係は、科学者コミュニティ間のみならず、そのコミュニティを超えており、こうした複数のコミュニティの参加によって多様な視点がディスコースもちこまれることとなる。こうして、科学知を伝達するディスコースは一挙に多声性を帯びると同時に、危険性の有無を争点に「ゆれ」を見せる。このような複数コミュニティの対立関係の構成は、科学者間／科学者－その他のコミュニティ間での（知識の）共通認識の不可能性を自らに表している事例とみることができる。

II. ディスコースの伝達の場の流動化

電磁波問題のように、科学者によって明確な研究成果がもたらされていない状況においては、伝達される知識が一時的なものとしてあつかわれること、すなわち時間を越えた間テキスト性が欠如していることを明らかにした。

記事4

En ce qui concerne la dangerosité des rayons émis par les téléphones mobiles et celle des ondes émises par les stations relais, les recherches, pour l'heure, ne sont pas concluantes, explique l'AFSSE.[*Le Figaro*, 23 juin 2005]

携帯電話が発する電磁波の危険性と中継局が発する電波の危険性に関して、現在のところ、決定的な研究成果は出されていないとフランス環境衛生安全局は説明する。

記事5

Aujourd'hui, plus de deux cents études scientifiques sur l'impact sanitaire des antennes-relais et des portables ont déjà été réalisées et une centaine d'autres sont en cours, en particulier la grande étude

épidémiologique Interphone, menée à l'échelle européenne dont les résultats, très attendus, devraient être disponibles dans deux ans. [*Le figaro*, 01 juin 2002]

今日, アンテナと携帯電話の健康への影響について200以上の科学的研究がすでに行なわれてきており, その他100件程度の研究は進行中である。とりわけ, 全ヨーロッパ規模で行なわれており, 非常に期待度も高く, 大規模な「インターフォン」の疫学研究は2年後に明らかになることになっている。

これらの記事では, 伝達される知識が「現在のところ」や「今日」という言い回しをとまなっており, 現時点で科学者によってなされている電磁波についての研究(成果)の状況の報告に従事しているようにみえる。このように, 科学的に不確実なディスコースは, 真に科学知を伝達する場というより, むしろ, 科学知の現在の状況や移動の報告の場である。その際の知識は, 無論, 流動性を伴うといえる。

つまり, このような電磁波問題についての一連のディスコースに向かう受け手として的一般人は, 電磁波が危険か否かについての明確な答えが得られず, 一言でいえば, 「あいまいな空間」に置かれていることが考えられる。

5.2 分析② - 「感情」の語彙とその使用

本節では, 電磁波問題に関するディスコースにおいて, 媒介者が受け手の感情を想定し, 記述していることを象徴する語彙とその総数を, 「名詞・形容詞群」と「動詞群」に分け, あらかじめまとめる。

表 1 想定された感情の語彙

	原文	日本語訳	計
名詞・形容詞群	inquiétude	不安, 心配	19
	rassurant	安心させる	28
	peur	恐れ, 恐怖	12
	souci	心配 (事)	8
	inquiétant	心配な	7
	préoccupant	気がかりな, 心配な	5
	angoisse	不安, 恐怖	3
	inquiet	心配な, 不安な	3
	craintes	恐れ, 心配	2
	impatience	苛立ち	1
動詞群	s'inquiéter	心配する	15
	(se) rassurer	安心させる (する)	11
	s'affoler	とりみだす	2
	craigner	恐れる, 心配する	1
	calmer	落ち着かせる	1
	総計		

※名詞・形容詞群 (74), 動詞群 (30)

これらの語彙によって、一般人の感情についての媒介者による想定が具現されるわけであるが、これらの語彙は、次のように大きく2つに分類することが可能である。それは、「不安」、「心配」、「恐怖」といったマイナスの評価をもつ語彙と、それらの対義語にあたる「安心」を中心としたプラスの評価性をもつ語彙である。つまり、電磁波問題をめぐるディスコースにおいて想定される一般人の感情が、「不安-安心」という尺度に基づいてとらえられていることが、ここから明らかになる。

続いて、以上に示した感情の語彙が、どのようにディスコースの流れの中に組み込まれているかについて、以下に事例を示し、観察・分析する。

記事 6

Conscients de l'inquiétude du public, justifiée ou non, les grands opérateurs améliorent leur matériel et songent à généraliser, pour rassurer l'utilisateur, le kit mains libres. (*Le Monde*, 28 mars 2002)

もっともなものであろうと、そうでなかろうと、大衆の不安を意識して、多くの技術者は機器を改良し、(携帯電話の) 利用者を安心させるため、ハンズフリー・キットの普及を考えている。

このように、電磁波問題をめぐり、一般人は、不安／安心という感情の担い手としてディスコースに現れる(大衆の不安 *l'inquiétude du public*)。そしてここに示される感情には、「もっともなものであろうと、なかろうと (*justifiée ou non*)」といったような評価が与えられている。

また、このディスコースにおけるもうひとつの参与者である「多くの技術者 (*les grands opérateurs*)」がなす行為は、一般人のもつ「不安」という感情の想定に則ってなされる様書き込まれている(大衆の不安を意識して、*Conscients de l'inquiétude du public*)。その行為の目的は、一般人が「不安」という感情もつことを前置きとし、それらを「安心」というポジティブな感情に導くため (*pour rassurer l'utilisateur*) との記述が見られる。このように、一般人がもつであろうとされる感情の想定は、技術者による行為の基盤として、さらにはその目的として導入されることがわかる。

以上に加えて、こうしたディスコースによって形成される一般人のアイデンティティーについて触れることで、このディスコース内に組み込まれる一般人の感情のあり方そのものを明示しておきたい。記事 6 の前半部分で、大衆を「不安な者」として位置付け、さらに後半部分においても、そのような大衆の感情を基盤として技術者の行為が記述されることを見れば、ここで想定されている大衆の感情はまさに「不安」である。それに対して、「安心」というポジティブな感情は、ディスコースが生産

される地点のものではなく、「物事がポジティブに進展した際の感情」とでもいえるものである。

このように、「不安」、「心配」などのネガティブな感情が想定される事例をもうひとつみておこう。次に示すのは、フランスの携帯電話会社・ブイグテレコム (Bouygues Telecom) が、電磁波についての一連の報道を受けて、自身の立場を表明したものを報告する記事である。

記事 7

TITRE: TELEPHONE PORTABLE Pas de danger pour la santé; Bouygues Telecom veut rassurer les usagers

Une inquiétude sans fondement rationnel, estime Jean-Claude Bouillet, directeur des fréquences et protection de Bouygues Telecom. Aucun groupe d'experts ne retient l'hypothèse d'un risque pour la santé, compte tenu des niveaux d'exposition constatés. Ceux-ci sont en moyenne cent fois plus faibles que ceux générés par les émetteurs de la radio FM et de la télévision. (*Le Figaro*, 19 octobre 2001)

タイトル：携帯電話は健康に害なし 利用者を安心させたいブイグテレコム。

合理的な根拠のない不安，と，ブイグテレコムの周波数・安全部長のジャンクロード・ブイエは評している。確認済みの〔携帯電話が放つ電磁波への〕接触のレベルからは，どの専門家グループも，健康への危険を仮定してはいない。というのも，そのレベルは，FM ラジオやテレビの送信機から放たれるものよりも平均して100倍以上弱いのである。

まずタイトルに着目すると，ブイグテレコムが「携帯電話は健康に害なし」ということによって「利用者を安心させたい」とある。ここから，「危険の不在 = 安心」⇔「危険の存在 = 心配」という論理的対立関係の存

在が読み取れる。

続いて、一般人に想定された感情に着目すると、「合理的な根拠のない不安 Une inquiétude sans fondement rationnel」とある。つまり「不安」というように一般人の感情を特定したうえで、その感情の性質にまで想定が及んでいることがわかる。では、このように想定される感情と、それに後続する記述との関連をみよう。ここでは、感情が「合理的な根拠をもたない」ことが、いかなる理由に依るのかについて、科学的な根拠を基に明示され、電磁波が危険でないことの根拠が示されている。つまりこの事例における一般人の感情は、科学的な記述のいわば「前置き」として示されていることがわかる。

以上をまとめると、第一に、電磁波問題に関するディスコースに登場する一般人に想定された感情の語彙は、「不安」などのマイナスの評価をもつものと、「安心」などのプラスの評価性をもつものに大別できる。そして、ディスコースが生産され、一般人に公表される時点において、一般人は「不安」という感情をもつ者としてディスコース上に位置付けられることが明らかとなった。こうした位置づけにより、電磁波問題においての一般人の立場が決定されているといえる。さらに、そのような「不安」という感情がどのような性質をもつのかということに至るまで想定が及ぶことも、以上の事例から読み取ることができた。そしてそのような感情の性質についての記述が、ディスコースを進展させる上でのいわば「前置き」となることを明らかにした。

5.3 分析③－科学知の伝達において想定される感情の機能

5.2では、電磁波問題のディスコースにおいて、一般人に想定される感情の語彙とディスコースの中でのそれらの語彙の使用に関してみた。本節では、一般人にあてられる感情の想定が、ディスコースを通じた科学知の伝達においてどのように機能するかについて考察する。主として、それらの感情が、科学的な研究結果の報告をD2上で繰り広げる際の「視

点」として組み込まれる点に着目する。

記事 8

[...]

Des données rassurantes

L'Académie de médecine appuie son propos sur des données expérimentales rassurantes et sur les premiers résultats de l'étude internationale Interphone portant sur 13 pays et qui vise à comparer l'intensité de l'utilisation du portable chez 3 000 malades atteints de différents cancers (cerveau, oreille interne, parotide) avec celle de témoins de même âge et de même niveau social. [...] Ces données sont considérées comme rassurantes, même si elles ne permettent pas d'augurer de ce qui peut se passer après 20, 30 ou 40 ans d'utilisation. (*Le Figaro*, 19 Juin 2008)

安心させるデータ

医学アカデミーの談話は、安心できる実験データと「インターフォン」の研究による国際的な研究の初期の結果に基づいている。インターフォンは、13カ国で取り組まれており、さまざまな癌（肺癌、中耳癌、耳下線癌）に侵された3000人の患者の携帯電話の使用頻度と、同じ年代で同じ社会層に属する一般の被験者との比較を目的としている。[...] これらのデータは、20年、30年あるいは40年にわたる使用後の予測をゆるすものではないとはいえ、安心できるものとみなされる。

記事 9

Les études sont rassurantes pour les antennes-relais. En ce qui concerne le portable, certaines expérimentations animales laissent entrevoir un effet biologique. Une grande enquête épidémiologique non encore publiée, si elle est globalement rassurante, laisse persister quelques zones d'ombre,

notamment pour des utilisations de plus de dix ans. (*Le Figaro*, 23 Avril 2009)

種々の研究は、中継アンテナに関しては安心であることを示している。携帯電話に関しては、いくらかの動物実験により、生物学的な影響が予見されている。未だ公表されていない大規模な疫学的調査は、全体としては安心できるもの、とりわけ10年以上の使用後のことに関しては影の部分が残されたままである。

記事8、9では、下線部に示されるように、感情の語彙が巧みに使用されている。そして、いずれの感情の語彙も、「安心」というプラスの評価をもつものであり、電磁波の危険性に否定的な研究結果を報告する手段として用いられていることがわかる。つまり、「危険の不在=安心」という論理が用いられ、科学研究の結果を「安心」と評価することで、「危険が不在であること」が伝達されている。すなわちここでは、D1をD2上で解釈する際の枠組みとして「感情」が用いられているようにみえる。

このように媒介者は、一般人が一連の電磁波問題に関する報道を受けて獲得したであろう「感情」を想定し、その想定された一般人のもつ感情の枠組みを、科学の枠組みにあてはめて記述することで、一般人にとっては抽象的かつ複雑なD1を一般人のほうへと接近させているように思われる。

こうして、マスメディアの科学ディスコースは、一般人の保持するディスコースと融合し、構成されることが明らかとなる。

6. 結論

本論文では、フランスのマスメディアにおける電磁波問題に関する新聞記事を取り上げた。そして、一般人がこの問題に関して抱いているであろう「感情」がディスコース上で想定され、このような過程を通して一般人が当該のディスコースに組み込まれることを明らかにした。また

そうして組み込まれる過程を通し、この問題の中での一般人の立場が決定されることや、想定された「感情」が、ディスコースを構成する上での前提（前置き）としてはたらくことが明らかとなった。

また、マスメディアを通した科学知の伝達に関して、一般人に想定された感情は、D1を紐解く際の枠組みとして用いられていることから、感情の想定はD2上での科学知伝達においても、D1を一般人のほうに接近させる役割を担うという面において有用であることが明らかとなった。

本論文ではとりわけ「感情」の想定について取り上げたが、媒介者がディスコースを構成する上で行なう「想定」という活動は、新聞記事のみならず、さらには科学ディスコースのみならず、マスメディア上で多様に見受けられる言語現象であると思われる。読み手／受け手に「何が想定され、ディスコースが構成されているのか」という点に関して言語研究を為すことは、ディスコースに埋め込まれた、イデオロギーや世論、社会的通念などを読み解く上で重要であると考えられる。

(博士課程後期課程)

主要参考文献

- Authier-Revuz, J. 1982. «La mise en scène de la communication dans des textes de vulgarisation scientifique.», *Langue française* 53, 34-47.
- Beacco, J.-C. 1999. *L'astronomie dans les médias*. Paris : Presse Sorbonne Nouvelle.
- Beacco, J.-C., & S. Moirand. 1995. «Autour des discours de transmission de connaissances», *Langages* 117, 32-53.
- Moirand, S. 1997. «Formes discursives de la diffusion des savoirs dans les médias.», *Hermès* 21. Paris : CNRS Editions, 33-44.
- Moirand, S. 2000. «Variations discursives dans deux situations contrastées de la presse ordinaire.», *Les carnets du Cediscor*. Paris : Presses de la Sorbonne Nouvelle, 45-62.
- Moirand, S. 2007. *Les discours de la presse quotidienne. Observer, analyser, comprendre*. Paris : Presses Universitaires de France.
- Mortureux, M.-F. 1982. «Paraphrase et métalangage dans le dialogue de vulgarisation.», *Langue française* 53, 48-61.
- Reboul-Touré, S. 2005. «Ecrire la vulgarisation scientifique aujourd'hui.», texte

téléchargeable http://sciences-medias.ens-lsh.fr/article.php3?id_article=65.

出口由美. 2010. 「科学の確実性とは何か? —マスメディアのディスコース分析を通して—」 関西大学大学院修士論文.